

肖柏と池田氏 一連歌師と連歌興行主催者について一

浅井 美峰

連歌は、長句（五七五）と短句（七七）を交互に連ねて一つの作品とする、中世に幅広く流行した文芸である。そして「連歌師」は、その連歌を職業とする者についての呼称で、連歌の興行に宗匠や連衆として参加するだけではなく、連歌・和歌・古典に関する知識や、興行に使用する発句などの授受、中央と地方の橋渡しなど、様々な役割を果たしながら乱世を渡っていた人々である。

基本的に、所謂連歌師らしい連歌師と言われるのは、宗祇に端を発する宗祇門下の連歌師たちからではあるが、宗祇の師の心敬などから、各地を訪れてその地で連歌の興行に加わるといことは広くされていた。そのような連歌の興行の中でも、百句を連ねて詠む百韻を十回行う千句興行は、それぞれ大きな意味を持って企画・開催されたものである。地域の有力者が連歌師を招いて行う千句は、文化的意味だけではなく政治的な意味も持つものであった。

その千句の中に、永正年間に摂津の池田で行われた「池田千句」がある。池田の有力者である池田正盛が主催し、連歌師肖柏の庵で肖柏の他にも多くの連歌師を招いて行われたもので、歴史的側面からの研究は存在するが、池田千句の中身自体への言及は乏しい。

そこで、本発表では、「池田千句」の中での連歌師肖柏と主催者である池田氏に焦点を当て、千句興行の中での連歌師と主催者それぞれの果たす役割や目的について明らかにしていきたい。他の千句との比較や、肖柏と他の連歌師の比較をすることで、「池田千句」の特徴だけではなく、大きく連歌史上において千句興行とは、そしてそれに関わる人々の関係とはどのようなものだったかを見ていきたい。